午未の間にて、未の方へより、海上五十五里程あり、めぐり五里ばかりの島にて、海ぎはも嶮岨なれど、新島に双びて國地への便り能く、順風には伊豆の浦々へ一日に走り、渡通船江戸へも常に行通ふ、時候暑寒も伊豆國に異ならずといふ、

〔伊豆七島調書〕神津島東西一里南北一里半程　江戸より海上五拾六里程

一家數百四十五軒、人數男二百五十九人女二百九十一人外に流人男七人、野牛有、數不相知、

正一位定大明神　寺一ケ所　豆州下田海善寺末　淨土宗　濤聞寺

一御年貢金七兩二分永二文づゝ、毎年定納仕候

一爲御救米、一ケ年五石六斗六升二合づゝ、被下置候、

一御圍米無御座候

一此國田方無之、畑方少々有之、粟、稗、胡麻、多葉粉等作り申候、其外椎の實、のたみの實、薯蕷、野老、葛、あした草を取、夫を食の足粮に仕候、

一此島稼には男は薪を伐、江戸へいだし、夏秋は鯉、鮭を釣、冬は海苔を取、江戸へ出し渡世仕、其外海鹿はゝ等取、夫食足粮に仕、女は蠶飼、葛、野老、あした草取、渡世仕候、

一廻船二艘、漁船二十四艘御座候、

一流人渡世之儀は、親類見繼無之者は、百姓手傳致、渡世仕候、〇中略

寶暦三年酉十二月

〔續日本後紀九仁明〕承和七年九月乙未、伊豆國言、賀茂郡有造作島、本名上津島、此島坐阿波神、是三島大社本后也、又坐物忌奈乃命、即前社御子神也、新作宮四院、石室二間、屋二間、闇室十三基、上津島本體草木繁茂、東南北方巖峻嶮崒、人船不到、纔西面有泊宿之濱、今咸燒崩、與海共成陸地、〇下略

〔倭訓栞前編三十美〕みやけ〇中略　三宅島は、北條早雲が得たる所、八丈島に近し、